

実物大骨格複製制作へ

単にできる構造を採用したのが特徴で、来年2月の完成が目標だ。国内初の恐竜に特化した大学博物館として3月に学内に開館した「恐竜学博物館」に展示するほか、出前授業などでの活用を想定している。

(小川耕平)

岡山理科大生

モンゴルで恐竜の発掘調査を行う岡山理科大（岡山市北区理大町）の石垣忍教授＝古生物学＝の研究室の学生が、アジア最大の肉食恐竜タルボサウルスの実物大骨格レプリカの制作を進めている。持ち運びができるよう組み立てや解体が簡

アジア最大肉食恐竜 タルボサウルス



実物大骨格レプリカの制作に励む岡山理科大の学生

レプリカは、モンゴル・ゴビ砂漠で発掘された全身化石と同じサイズ（全長11メートル、高さ2・5メートル）でプラスチック製。鉄パイプが通った骨格を

ねじで固定していく従来の方法と異なり、持ち運びやすいよう、背骨や尻尾など全身を九つの部位に分け、それぞれを支柱で支える独自の仕組みを採用した。骨は大小約300個あり、結束バンドなどで止めるため、解説する際にひとつずつ取り外すこともできるという。

石垣教授が卒業論文のテーマとして研究室に所属する生物地球学部の4年生に提案し、西岡伊織さん(21)、太田義晃さん(22)、加藤祐之助さん(22)が春から制作に携わる。

3人は組み上げ作業に欠かせない設計図を描くため、工学部で製図の講義を受講。8

博物館展示、出前授業活用

月からはアクリル絵の具を使って着色作業を始め、化石の質感や雰囲気を出すよう、くぼみは色を濃く塗るなど工夫を凝らしている。

色付けは現在8割ほど進んでおり、3人は「手に取っても本物と間違えるような色にこだわっている」「レプリカを目の前にした時に迫力が伝わるようにしたい」と「完全形」をイメージしながら作業を進めている。

完成後、レプリカは恐竜学博物館の展示の目玉として活用するほか、講義や学外での出前授業での使用も検討している。石垣教授は「一つ一つの骨をじっくり見ること細かな形や関節の構造が分かるのは全身レプリカならではの。恐竜の体の不思議さを実感してもらいたい」と話している。